

## 多収・良食味の晩生水稲新品種「あきまさり」

○坂井 真・岡本正弘・田村克徳・梶 亮太・溝渕律子<sup>1)</sup>・平林秀介<sup>2)</sup>

八木忠之<sup>3)</sup>・西村 実<sup>1)</sup>・深浦壮一<sup>4)</sup>

九州沖縄農研<sup>1)</sup>・農業生物資源研<sup>2)</sup>・作物研究所<sup>3)</sup>・国際協力機構<sup>4)</sup>・熊本県農研セ

### 【目的】

近年、九州地域の稲作では市場評価の高い中生種のヒノヒカリへの過度の作付集中により、収穫作業の競合や共同乾燥調製施設の運営の支障、刈り遅れ等による品質低下等が懸念される。このため平坦部の稲作地帯を中心に、中生品種と熟期分散できる食味の良い晩生種の導入が期待されていた。このニーズに応えるため、「ユメヒカリ」熟期で食味と栽培特性に優れた「あきまさり」を育成した。

### 【育成経過】

「あきまさり」は、1996年に九州農業試験場水田利用部稲育種研究室において、強稈・耐冷・良食味・多収品種の育成を目標に、ともに良食味で強稈の晩生種「南海 127号（かりの舞）」を母とし、「西海 230号（あきさやか）」を父として人工交配を行った雑種の後代から育成した品種である。1997年に個体選抜を行い、1998年以降は系統栽培によって選抜固定を図った。2001年(F6)より「西海 248号」の系統名を付し、関係各府県に配布して地域適応性を検討してきた。その結果、「ユメヒカリ」熟期の良食味で多収の特性が認められ、2005年に熊本県において奨励品種に採用され、「水稻農林 410号」として命名登録された。

### 【主要特性】

稈長は「ユメヒカリ」より3~5cm程度長く、穂長は「ユメヒカリ」よりやや長く、穂数は「ユメヒカリ」並かやや少ない。草型は中稈偏穂重型の粳種である。稈の細太、稈質はともに「ユメヒカリ」並の“中”で耐倒伏性は「ユメヒカリ」並の“強”である。脱粒性は“難”，粒着密度は「ユメヒカリ」より密の“やや密”である。出穂期は「ユメヒカリ」より1日程度早く、籾数が多くつきやすいので登熟期間はやや長く、成熟期は3日程度晩生であり、暖地では“晩生の晩”に属する。穂発芽性は「ユメヒカリ」よりやや発芽しやすい“中”である。

いもち病の真性抵抗性遺伝子は“*Pii*”を保有すると推定され、圃場抵抗性は葉いもち、穂いもち

ともに「ユメヒカリ」並でそれぞれ“やや弱”，“中”である。玄米収量は「ユメヒカリ」を約10%以上上回る多収である。玄米の形状は「ユメヒカリ」並の“中”，玄米の大小は「ユメヒカリ」並の“中”である。粒厚は「ユメヒカリ」よりやや厚く、千粒重は「ユメヒカリ」より1g程度重い。玄米品質は「ユメヒカリ」並の“上下”である。炊飯米は粘りにすぐれ、食味は「ユメヒカリ」にまさり、「ヒノヒカリ」「コシヒカリ」に近い“上中”である。

### 【適地と栽培上の留意点】

適地は九州地域を中心とした暖地の平坦部である。栽培上の留意点としては、いもち病には強くないので、多肥栽培をさけ、適期防除を行うこと、また、白葉枯病には弱いので、常発地での栽培を避けること、籾数が多くなりやすく登熟期間が長いことに留意して刈り取り時期を定めることが上げられる。

表1 あきまさりの生育特性(育成地、1999~2004)

品種名 系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	精玄米重 (kg/a)	玄米千粒重 (g)	耐倒 伏性
あきまさり	9.05	10.31	86	20.8	350	61.7	22.1	強
ユメヒカリ	9.06	10.29	83	19.7	362	56.1	21.1	強

品種名 系統名	穂発芽 性	いもち遺 伝子	葉いもち	穂いもち	白葉枯病	縞葉枯病
あきまさり	中	<i>Pii</i>	やや弱	中	やや弱	罹病性
ユメヒカリ	やや難	+	やや弱	中	中	罹病性

表2 あきまさりの品質・食味特性(育成地、1999~2004)

品種名 系統名	玄米 品質	食味	食味総合値 (基準:コシヒカリ)	アミロース 含有率(%)	蛋白質 含有率(%)
あきまさり	上下	上中	-0.16	19.2	6.3
ユメヒカリ	上下	上中	-0.40	19.8	6.7

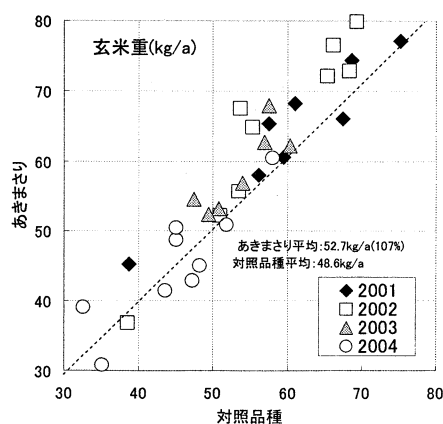


図1 奨励品種決定調査におけるあきまさりと対照品種の収量